

跋文その2

2022. 4. 18

そして、そのような戦後復興から高度経済成長へ、さらにはバブル経済とその崩壊後の今日へと、この国の教育の変動の歴史のその時々において、青空を見上げていた児童のかたわらに立った者がいました。就職列車に乗り込む生徒に向かってちぎれるほどに手を振り続けた者がいました。受験戦争の激風、シュプレヒコールの渦の中にあつた受験生、学生に、とまどいながらも「きみの道を行け」と告げた者がいました。校内暴力やいじめの中にあつたかれら「子どもたち」の子どもの盾となった者が、確かにいました。教育の置かれていた状況は様々であり、また、困難に満ち満ちたものであつたその時々において、ただ愚直に、状況に立ち向かうしかなかった者たちがいました。

ある年の3月2日の新聞に、見覚えのあるお名前を見つけた。あの跋文（ばつぶん）を書いた方だった。何と自分の勤務先の所属長として4月1日に登場することがわかった。楽しみではあるが、怖さもあつた。なぜだか緊張してきた。上記のような跋文のレベルに果たして自分がついていけるのかという不安である。

その後、何度も所属長としてのお話を聞いたが、毎回楽しみだった。今回はどんな話をするのだろうかという期待感があつた。それだけ、通り一遍のような当たり前の話ではないということである。跋文の中にも出てくるが、よく日本、我が国、この国というレベルで話をされていた。それまでの私は、いつの間にか市や県レベルで思考がとどまっていたように思う。

震災のこともよく話されていた。そこにはいつも思いが感じられた。心に残る言葉を一つと言われたら、私は“疾風勁草”を挙げる。「疾風に勁草を知る」である。意味は、激しい風が吹いてはじめて丈夫な風が見分けられることから、困難や試練に直面したときに、はじめてその人の意思の強さや節操の堅固さ、人間としての値打ちがわかることのたとえである。

まさしく震災における福島県のことである。福島県民のことである。そして今は、日本中が世界中が疾風のただ中にあるのかもしれない。今は、日本人としての値打ちが試されているようにも思える。跋文は、さらに続く。

凡庸な言葉ですが、教育は人間的な営みです。人間的な営みであるがゆえに、もたらされる成果があり、克服すべき課題が生じます。教職員として、その事実を、私たち自身の身に即して、まっとうに受け止めたいと考えます。